

## 福江氏の「パブリにもものもうす」にお答えする

日本天文学会欧文報告編集長 内田 豊

「パブリ (Publ. Astron. Soc. Japan) は編集部がけしからんから投稿しない」などというのではなく、「パブリは編集部がけしからんから苦情をぶつける」という福江さんのお考えは、PASJ をより良くしていくという立場から、編集部は前向きなものと受け取っております。福江さんの文章に出てくる「権柄づくで抑え込む」その他のことは、「ああ、あの手違いがそう受け取られているのか」、「あの編集理事の直言は得てして反発を招きやすいのだが……」、などと思い当たることも多く、私共不完全な人間達のやっている編集部の不徳の致す所で、甚だ申し訳なく思っております。

さて、福江さんの「パブリにもものもうす」(＝同氏が私的に配布された“同完全版”，“同簡約版”を更に同氏が天文月報掲載のために短くしたものを“同完全版”，“同簡約版”と共に拜見して、争点をまとめてみますと、多分、

イ。「文法的ミス、内容の明らかなミス、その他著者からの要請によるもの、その他特別の事情(福江さんはひょうせつ等を挙げて居られます)以外は編集は論文受理後には原稿にタッチすべきでない」のかどうか、

ロ。Scientific journal で accretion disk のような対象を「きまじめすぎる科学論文をすこしでも面白くするために」「Lady」と表現するたぐいのことの是非、

ハ。これを修正するにあたって編集部が「著者に断りなく内容を改ざんした」のかどうか、

の三点にまとめられるのではないかと思います。

編集部のこれらの点に関する見解はつぎの通りです。イについては、福江さんに多少一般的でない思い込みがあるのではないのでしょうか？ 受理されるかどうか分からないうちに論文を完全にその雑誌固有のスタイルにしようと手をかける雑誌は聞いたことはなく、これは必ず受理(これは論文が scientific に掲載の価値ありと判定されたということ)後になされます。修正については勿論著者の諒解が求められます。一般的考え方としては福江さんのお考えと違って、むしろ受理後は論文は著者の手を離れ、コピー・エディティング等が行なわれるフェーズとなり、例えば、初校で多くの赤が編集側により入れられますが、逆に著者の都合で受理後に修正をしようとするほうは外国の雑誌などでは料金を課される場合も少なくありません。この辺の事については投稿規定も

ご参照いただきたいと思います\*。

ロ。を否定するのはユーモアを解さぬ輩ときめつけられそうですが、これは正に上に出てきたスタイリングとの関係で編集部が賛成できかねた所です。レフェリーが she, her 等にひっかかるものを感じて修正したのも、英文アドバイザーが“著者はふざけすぎではないか”とコメントして来たのも、多分「scientific journal では面白くあるべきものは内容であって、言葉ではない筈」というクラシカルな見解を編集部と共有していたからだと思えます。

次に、ハ。についての事実関係は後で触れることとして、われわれは福江さんにこう叫ばせる原因となった手違い等が編集部側にあったことは認めなければならないと感じております。編集部のその手違い(手続きの前後不順、たとえば諒解をとりつけてから修正をするべきところをルーチンに追われて手順上一応修正をしておいてから諒解をとりつけようとする担当者が考えたこと、しかも悪いことに、それを諒解をとりつける前に送ってしまったこと、等々)、担当者の対応が、言葉の問題と思えますが、多分きついものと受け取られたであろうこと、および、私が福江さんと電話で話した時に、福江さんの要請のうち“著者の意思に反して……と入れてほしい”という部分について、難色を示したが、その理由(下記参照)までいわなかったためか福江さんには印象が薄かったかもしれないこと、等々については再び編集長として謝っておきたいと思えます。

さて、ハ。については、以上のように編集部として遺憾の意を表すべき点も多いのですが、一方、事実関係からして「著者に断りなく内容を改ざんした」というような、いわれない誹ぼうには逆に強く抗議しない訳にはいきません。「Lady」という語以外に編集部が行なった内容にわたる変更は全くありませんでしたし、「著者に断りなく」というのも正しくありません。(途中の手違いを別として)最終的に“Lady”が修正されたのは、まさしく著者との合意によります。「編集部責任において文末に適切なコメント (editorial note) をつけるなりして、出版が遅れないように進めてほしい」という福江さんの提案(“パブリにもものもうす”完全版6ページの8月22日付福江氏の手紙参照)に編集部が同意して実

\* 論文が受理されると、一定期間の後、初校、原稿、及び外人による欧文修正が著者に送られる。欧文修正は意図する所が変わらない限りとり入れること(投稿規定日本語版)。

現したことです。editorial note としてはできるだけ客観的に事実のみを書いたつもりです。[多分、福江さんはその前日の電話での福江さんご自身の発言（こちらは同意してない！）から“編集部が著者の意志に反して修正した”旨 editorial note に書かれることを期待されたのでしょうか？ しかしこれには編集部はつぎの理由で同意しなかったのです。すなわち、編集部は著者の意思に反して内容を勝手に変えたりするつもりは今までも、これからも、毛頭ありませんし、いわんやそんな事を宣言することなどは考えてもみないことです。しかし同時に、固有のスタイルを持つことを遠慮するつもりもありません。これは最も自明な編集の仕事の一つと考えてよいでしょう。福江さんのお考えと違って、これを受理後に編集が行なわない雑誌を探すことのほうが難しいのではないのでしょうか？ 逆に、それを受理前の論文に対して行ってしまう雑誌があるとしたら行き過ぎではないでしょうか？ あるいは、これが終わるまで受理は遅らせるのがよいということになるのでしょうか？ これは、イ. についての福江さんの誤解にも関係するように思われます。] 上述の手紙は、福江さんが編集の主張を容れて「著者の意思に反して……」と入れて欲しい」という前日の主張はとり下げ、適当な editorial note をつけて“Lady”を修正することにより出版を急ぐ、そのうえで後日このことについては是非を広く聞きたいと提案されたのだと編集部が受け取ったのはそう変な受け取りかたではなかったと思います。このような事情ですので「著者に断りなく内容を改ざんした」などというのは当たらないと思います、その後にあった福江さんの editorial note についてのコメントについては、8月22日の手紙との関係で編集部としては理解し難い思いでしたが（電話での私の話は注意を払われていなかった？）、その為に既に進みつつある論文処理を止めることは他の論文にも影響を及ぼし生産的でないのでそのまま進めさせて頂きました。後に残ったのは広く議論を求めるという点で、それが今度のこの討論なのだと思います。読者のご判断を待ちたいと思います。

以上福江さんの論に最低必要と思われる反論をさせて頂きましたが、一方編集長としましては福江さんの反論を招いた編集部の対応の総体（私の対応した部分を含めて）について反省するところも大いにあります。人様が一生懸命書いた論文を、主にレフェリーの判断に依るにしても、これはよし、これはよくないなどとやるわけですから反感も持たれ易いのだとは思いますが、特にわれわれが通常やっているような対人折衝をして、万一感情的になって声を荒らげたりすれば、これはとんでもない高姿勢な対応ということになってしまうし、また、意図を良く説明しきれずにステップをとれば“権柄づくで抑

え込もう”とする印象になってしまうのだと思います。投稿者の気持ちを汲んだ対応に欠けるところがあったのではないかと編集部も反省しています。

福江さんのおっしゃるように、パブリはわれわれ皆のもの（編集部のものでは勿論なく天文学会会員のもの）です。幸いそのような状況ではありませんが、もし仮に、皆がパブリを盛り立てていくのをやめてしまえばパブリは成り立たないことは明らかです。しかし、そんなことになれば天文学会会員はその独自のメディアを失って後悔することになってしまうわけで、福江さんの「ケンカをしてでも改善を求めて行こう」という態度は基本的に正しいといわざるをえません。われわれ編集理事は日々交替していくものですが、パブリ自身はこれからの“日本の世紀”にむかって息長く発展を迎えていく可能性のあるものだとすることは私は確信しております。福江さんのような苦言をふくめて、会員=読者の皆様からの建設的御提言によりパブリを前進させ、皆のものとして盛り立てて行くことを心から願います次第です。

以上

## 雑 報

### マックホルツ (1988j) 新彗星

国立天文台に入電した IAU 天文電報中央局からのテレックス、及び IAU 回報によるとアメリカの D. E. マックホルツは 27×120 双眼鏡で新彗星を発見した。発見位置と発見光度は下の通りである：

1988年8月6.470 UT

$$\alpha = 4^{\text{h}}41^{\text{m}}3, \delta = +0^{\circ}39' \quad 8.6 \text{ 等.}$$

この彗星はマックホルツにとって4個目に当る。

尚、国立天文台へは日本国内から、長野県の高見沢今朝雄氏8月8.738日、栃木県茂木市の谷中哲雄氏8月8.746日、静岡県寺迫正典氏8月8.754日、兵庫県豊岡市の入江良一氏8月8.785日、香川県の藤川繁久氏8月8.794日のそれぞれ独立発見の報告が届いた。天文台としては、マックホルツによる発見より約2.8日遅れてはいるが、独立発見であることを記して IAU 天文電報中央局へ連絡した。

天文電報中央局の計算による暫定軌道要素は下の通りである (IAUC 4637)：

$$\begin{array}{l} T = 1988 \text{ 年 } 9 \text{ 月 } 17.22 \text{ 日 ET} \\ \omega = 349^{\circ}85 \\ \Omega = 167.40 \\ q = 0.1561 \text{ AU} \end{array} \left. \begin{array}{l} \\ \\ \\ \end{array} \right\} (1950.0). \\ i = 40.63$$

(香西洋樹)